

Lemon

檸檬

Juichiro Takeuchi

竹内銃一郎 戯曲集



而立書房

Lemon

檸檬

Juichiro Takeuchi

解散まで、9本の上演台本を書く

1980年 秘法零番館を結成

1981年 第25回岸田演劇戯曲賞受賞

現住所 埼玉県浦和市常盤 1-3-9-706号

檸檬——竹内統一郎戯曲集——

1980年5月25日 第1刷発行

1985年5月25日 第2刷発行

定 価 1800 円

著 者 竹内統一郎

発行者 宮永捷

発行所 有限会社而立書房
東京都千代田区神田神保町1丁目20番地
振替・東京 9-174567 / 電話 03(291)5589

印 刷 科学図書印刷株式会社

製 本 大口製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。 0074-0283-3359

© Junichiro Takeuchi 1985, Printed in Tokyo

檸

檬

竹内銃一郎戯曲集

目次

少年巨人	5
檸檬	61
S F・大冒談	133
悲惨な戦争	217
上演記録	291
あとがき	294

少年巨人

登場人物

旧・ミスター（或いは父）

新・ミスター（或いは兄）

マシン（或いは弟）

ナボナ（或いは母）

審判

季節

泣いた鴉も板硝子 通底不能の厳冬直下
場所

強者どもが消えた後のスタジアム 或いは柱時計の振りも踊る感情的なリヴィングルーム

厳かに「君が代」が流れる――

彼方に審判 現われて 声高く

「プレイボール」

「昭和三十三年 栄光の巨人軍に入団して以来今日まで十七年間……」とかつて《ミスター》と呼ばれた
長島茂雄の引退声明が聞こえて来る

障子に明かりさし 男と女の影がうつる そのハレーションで 柱にロープでくくりつけられた新・ミ、
スターの首うなだれた姿が仄めく

障子のむこうから

女

ね

男

なんだ

女

あなた あの方が好きなんですしよ

男

好きだ

女

わたしよりも

男

あの方って誰だ

女 ふざけないでよ 真面目なんだから

男 真面目なのか

女 ええ

男 良いね

女 ごまかさないでね 本当のこと返事して

男 はい

女 はいだなんて……あなた あの方を嫌いだと言ってくださらない

男 誰にだ

女 わたしに――

男 言った方がいいのか

女 言ってくだすった方がいいわ

男 じゃあ 嫌いだ

女 じゃああって どういうわけなの

男 それでは という意味です

女 じゃあ あの方のどこがお嫌いな

男 眼と鼻と口と手と足と首と声と 肩が嫌いだ

女 好きなところはあとの残りが全部なの

男 あと何が残っているんだ

女 髪も残っているし 胸も頬も顔も残っていますわ

男 ずいぶん残っているんだな

女 まだ 心臓も胃もあるわ

男 心臓も胃も言うのか

女 見えないところは言わないの

男 言ってもいいさ

女 言ってちょうだい

男 お前が今言ったのと 脳と腸と——腸はまだだったな

女 ええ

男 腸と……それから何だろう

障子の明かり 消える

キラキラと星の瞬くような音楽

月光——促されたように 新・ミスター ゆっくり顔を上げる

新 月あかりの下 無人のグラウンドに俺たち 十米ほど離れてむき合う 奴の傍には夜目にも映えよ
と石灰をまぶした練習用ボールが山と積まれて 真夜中 奴の奇声が闇をつんざき 細身のバツ
トをひと振りふた振り オウと応えて小石を蹴散らし カカトを上げて身構える俺だ バツトが

ヒュンと弧を描く　ボールにまぶした石灰が火の粉のようにパッと飛び散る　うなりをあげて
地をかみながら　俺を目がけて　熱球が　真一文字だ！

いつの間にか　バットを持った旧・ミスター　現われて　新のセリフが終わるや否や　一発二発と新
をバットでぶん殴る

新　千本ノックの始まり！

バシッ　バシッと肉を撃つ音が鈍く響いて――

朝日がさし込む

何事もなかったように

旧　マシン　水だ

背筋をピアノ線で吊ったような男　マシンが　じょうろを持って飛んで来る

旧　なんだ　それは　俺はヤマタノオロチじゃないぞ　口はひとつしかないんだ　そんなもので水が
飲めるか

マシン 素早くUターンして 今度はオチョコに水を入れてソロリソロリと現われる

旧 マシンノ

マシン ミスターノ

旧 俺の顔をよく見ろ その程度の水で俺の喉の渇きがいやされると思ふか 俺はみの虫じゃないんだぞ

マシン ミスタ

旧 早く水を持って来い 慌ててるひまなんかないんだ

マシン とって返し すぐさまコップに水を入れて飛んで帰って来るが 文字通り飛んで帰って来たため アッチでつまずきコッチでぶつかり 旧の手に渡された時には コップの中に水はない

旧 マシンノ

マシン ミスタノ

旧 俺はヤマトノオロチでもないしみの虫でもない ましてやホタル等ではさらさらない 今現在わたしの欲しているのは 滴ではなく水だ 分かるね わたしの欲しているのはダンジテシズクナドデハナイノ

マシン ミスタ！（と戻りかかるが）

旧 もういい お前に頼みごとをしたのが間違이었다

マシン ミスタ

旧 たったコップ一杯の水を思うように飲めないだなんて 全く 砂漠のような東京じゃないか

マシン ミスタ！

旧 マシン わたしの欲しいのはミズダ！（と去る）

マシン 旧が消えたのを見届けて 首うなだれた新に近づき 持っていたタオルで新の体を拭く 愛情
を込めて ゴシゴシと まるで自転車でも磨くように

そして 新の耳元で 例えは「朝の光りにさらされた あんたはまるで子供のままだ く」と囁いた
りするが むろん 誰の耳にも届きはしない

旧 戻って来る

マシン 慌てて新から離れる

旧 ああ 飲んだく ざまあみやがれ 胃袋の中に鯨を放し飼い出来るほど飲んでやったぞ（と元
気はつらつ バットを振って）さあ 元気出してゆくぞお

マシン オー オー

旧 声を出せ 声を出すんだ 手前ら お通夜の晩じゃねえんだぞ 下ッ腹に力を入れて 声を出す
んだ

マシン オー オー

旧 声を出せえ

マシン オー オー く く

旧 新に近づき 何か話しかけるがマシンの声がひどくうるさい そこで旧 まるで拡声器と化したマ
シンをバットでぶん殴る

マシン ?!

旧 何を考えているんだ お前のワンマンショーじゃないんだぞ チームワークを考えろ チーム内
におけるお前の果たすべき役割とは何か

マシン ミスタ

旧 レギュラーの邪魔にならないよう 隅っこで犠牲パントの練習でもしていなさい

マシン ミスタ!

旧 マシン!

マシン ミスタ!

新 ああ

旧 おお

新 何て静かな朝だろう

旧 やっとお目覚めのようだな

新 足の小指の爪の先から 身体中が溶けて流れちまいそうな 今朝の静けさじゃないか

旧 傷は痛むのかい

新 こんな静かな朝には 一人静かにバロック音楽でも聞きながら

旧 傷は痛むんだろ

新 カッポレなんぞ踊ってみた

旧 傷は痛くはないのか

新 残念だな 俺は極めて健康だ 心身ともに健康そのものだよ

旧 (ニッコリと) 元気でなによりだ

新 (ニッコリと) お互いにな

旧 新をバットで殴る

マシン ナイス・バッチン!

旧 傷は痛むんだ

新 ああ 痛くて痛くて ……涙が出るよ

旧 マシン こちらのお方の傷口に 上等のツバキ油を塗りたくってあげなっさい